

《いのち》を教えるということ

飯田 篤司

《いのち》をめぐる倫理のあり方には、これまでも少なからぬ議論が蓄積されてきた。しかし今日われわれが直面している状況は、全く新たな倫理的な問いを生んでいる。生命医療科学の進展によって、かつては人知を超えた力に委ねられていた人間の生の始まりと終わりは、人間自身の選択と決断に委ねられるという事態が出現した。例えば、生殖技術やクローン技術、再生医療は、これまで問われることがなかったような形で、胎児や胚や生殖細胞の道徳的位置を問題としていった。ES細胞や末期医療を巡る問題は、今日も新聞紙上を日々賑わしている。あるいはまた、脳死・臓器移植における死の定義や、ホスピスや緩和医療など、死の意味というものが改めて問われている。

こうした状況の中、人間の生死をひたすら対象化していく自然科学の視線に抗すべく、真に「人間らしい」命の倫理が求められており、そこにこそ生命倫理学という学問の意義が存し、そしてまた宗教の現代的意義もあろう。こうした中において、「生命倫理とキ

リスト教」という講義は、キリスト教教育の理念を掲げている大学であれば当然あってしかるべきであろう。また《いのち》をめぐる混迷に際し、その指針を宗教伝統に求めることにもさほど違和感はあるまい。伝統的に人間の生死の地平を司ってきた宗教に、孤立化し無機化されていく現代の《いのち》の光景に抗う「拠り所」としての期待を寄せることは自然にも映ろう。実際、「無宗教」を自認しているほとんどの「普通の」学生たちにとっても、いまだ宗教は「信憑性の地平」として機能していることがうかがわれた。

しかし、その「菌切れ」は必ずしも良いとはいえない。一般に、宗教とは何よりも「教義体系」であり、明確な「倫理的指針」を示しうるとの期待がある。反面、「それゆえにこそ固定的で、時には混乱の原因にもなる」との懸念もあろう。「生命倫理とキリスト教」という講義タイトルからはこうした内容が想像されよう。そのような宗教理解はもちろんある程度有効ではあるが、実態とは違い。宗教も実際には、「解釈」の作業が必然的に介され、思

いのほか創造的で柔軟でもある反面、頼りなくもある。

宗教に代表される伝統的な倫理観も必ずしも無批判的に前提としうるものではなく、むしろその凋落こそが、今日の混乱を招いた一因であるとも解しうる。また古代世界において書かれた「聖典」が、現代の最先端の医療科学が生み出した状況に対して、どのようなことがらを、いかなる資格で提言しうるのかも自明ではない。ましてやキリスト教文化圏ではない現代日本において、「生命倫理とキリスト教」というテーマがいかなる意味があるか自体も定かではない。

そもそも、《いのち》をめぐる倫理的判断は、「そもそも一体誰が判断する権利があるのか？」という素朴かつ本質的な問いを回避することができず、いつまでも「後ろめたさ」と表裏になった「不確実さ」が残る。生命倫理という学問が、先端技術の実用化に向けた単なる「襖」ではないとすれば、その存在意義はこうした「居心地の悪さ」をあえて直視していこうとする姿勢自体に存することとなる。それゆえ、「生命倫理とキリスト教」という講義においても、そこで求められるべきは、「上」から判断してもらおうという安直なものではありえないこととなる。現代、《いのち》をあえて宗教と結び付けて問うていく必然性は、何らかの権威から「正解」を演繹することではなく、善意志をもっていかに建設的かつ

連続的な人間観・人生観を語ることができるのかという、その苦闘の軌跡そのものにあるとも思われる。

こうした認識の下、この講義では、その「葛藤」の模様を辿っていくことを主眼とした。もちろん、神学関係の学科においては、「キリスト教は、いかに現在の生命倫理問題について対処していけばいいのか」といった問題設定も有効であろうが、全学共通カリキュラムのような多様な学部学科生から構成される講義には必ずしも妥当しないと判断し、むしろ学生自身に主体的に自己自身の問題として「葛藤」してもらうことを求めていった。

授業では、《いのち》をめぐる諸論点を様々な角度から検討しつつ、生死の地平や心身の癒しに伝統的に関わってきた宗教、特に近代世界の価値観にも深く関わってきたキリスト教倫理の現代的な可能性とその問題を考察していった。その作業にあたっては、たえず現代日本社会に生きるわれわれにとって「いかなる意味があるのか」を問いながら進めていった。具体的には、講義での「達成目標」は以下のように設定した。

- ① 昨今の生命技術革新によって生じた生命倫理にまつわる問題構制の理解
- ② キリスト教倫理をはじめとする宗教伝統の、現代における倫理的意義の理解

至極当たり前ではあるが、①生命倫理問題に関してはまず、生物学の基礎知識が不可欠であるのみならず、問題にいたる現代の医療—法制度の知識も少なからず要される。②倫理的問題についても、キリスト教は言うに及ばず、哲学や倫理、それに宗教というもののあり方までも当然問われていく。どの講義も広がりは無限であり、いい訳にはならない。ただ、全学共通カリキュラムの一環として開講されるにあたっては、いかに適正に焦点を絞るか（教員側にしてみれば「どこまであきらめるか」）が課題となると予想された。

講義では「いのちの始まり」と「いのちの終わり」という大きく二つのテーマを設定した。第一部「命のはじまり」では、「人工授精・体外受精」「人工妊娠中絶と出生前検診」「遺伝子をめぐる諸問題」、第二部「命のおわり」をめぐっては、「死に対する態度、末期医療」「脳死と臓器移植」「安楽死と尊厳死」といった内容を順次取り上げていった。どのテーマも今、切実な問題であり、学生の反応も大きかった。特に第一部「人のいのちの始まりをどこまで制御してよいのか」という問題に対しては、女子学生からは、出産というライフ・イベントがリアルであるためか、切実ささえも感じられた。また「いのちの終わり」という、「死なない気」でいるような学生たちにとっては縁遠そうな話題についても、少なからぬ反応が返ってきた。「人間らし

い」死に方への切実な欲求とともに、映画や小説などの影響も少なからぬ要因であったようだ。

ただ、こうしたテーマが「キリスト教」と結び付けられたときの反応は未知数であった。当初、学生の関心は七八割方、生命倫理によっていた。キリスト教の影の薄い日本で、キリスト教徒でもない学生にとって、「生命倫理とキリスト教」という二つの語彙の並列がどのように受け止められるかには、正直危惧もあった。確かに生命倫理の諸テーマ自体も、トムソンのバイオリニストやハリスのサバイバル・ロッタリーのように、絵空事のようにも響く危険性もある。しかし、プロ・ライフ派とプロ・チョイス派との「死闘」、大統領選に与える宗教の影響、「グローバルスタンダード」の生成といったアメリカ合衆国の現状を挟むことで、素直に問題のリアリティーは実感してもらえたようであった。

ただ予備知識や関心に差があることは覚悟していたが、予想以上であったことも事実だ。特に、生物学に対する基礎知識の偏差は想定外であった。「総合A群」の中でも「生命・物質・宇宙」という自然科学的な色彩の強い講義群に並んでいる関係上、「見劣りせぬ程度には」生物学や医療技術などについても盛り込む予定であったが、DNAの基礎から始める必要があったため、当初の計画を変更せざるをえなくなった。人間も生物である以上、高校

ではせめて生物くらい必修にした方が望ましいのでは、というのが実感である。

ただし、関心や予備知識の偏りにも拘わらず、概して学生の受講姿勢が真摯であることには驚かされた。授業中の私語や居眠りもほとんどなく、リアクションペーパーにも期待以上に積極的な反応が寄せられた。問題意識の高さであろうが、五限開講という時点で、すでにそれなりの興味がある学生に絞られていたという事情もあろう。

ただその「稀有な」真剣さのうちに、逆説的な「危うさ」も感じられたのも事実である。授業の初回に、人口妊娠中絶や脳死に関する意見をアンケート集計したところ、「人工妊娠中絶には反対で、脳死も人の死とするには抵抗感がある」という、ある意味、日本の生命倫理の「王道」を反映した意見が、無作為抽出の世論アンケートよりもはるかに大きい結果となった。「熱心で、関心が高く、心優しい学生」に対して文句をいう筋合いは無いが、そこに過度の「正しさ」を感じざるをえなかった。古典的な「学問の価値中立性」という難問がそこにはある。

ともあれ、「葛藤」自体を体験してもらうことを講義の主眼としている以上、何らかの「安心できる」方向を示すことは、意図して禁欲的なまでに自制する覚悟で授業にのぞんだ。そのた

め、例えば授業の初回では、キリスト教関係では非常に悪名高いP. シンガーのキリスト教倫理批判と、カトリックの教皇勅書とを、同列に論じることから出発した（なお、この問いは、そのまま最後のレポート課題ともした）。こうして一度、判断不能な状況にまで立ち返ってもらい、そこから再度考えていくことを要求し、「正解」は一切示さない。或る意味、「心優しい」学生たちを苦しめることともなり、こちらとしても良心が痛むこともあった。

ただ教員側の心配をよそに、学生たちからは「考えるよい機会になった」という好意的な反応が概ねであった。ただこれもまた、そのように「方向付け」てしまった結果かどうかは自信はない。実際、「趣旨は理解できる」が「それでも『決定不能』な状態からいかに『決断』をしていくのか、その一例としてでも個人的な見解を聞いたかった」という意見もあり、まっとうな要求であるとも思われる。今後もこの授業を担当する限り、自問自答し続けていく課題であろう。

最後に授業に関する技術的な諸点について気づいたことを記したい。昨今の授業においては、「分かりやすさ」が重要な要件となっており、パワーポイント教材や映像資料を補助手段として使用することも珍しくない。この授業でも「映像」を多用することで理解

の一助とはなったようだが、問題もな
くはないようだ。

パワーポイント資料については、周
知のように、必ずしも学生側からは好
評ではない。つつい情報を過剰に載
せてしまう教官側の「欲」も確かに一
因ではあろう。ただ、それ以上に、
「真面目」であればあるほど、提示さ
れた情報はすべて写しておかねば不安
になるというメンタリティと、「情報
の取捨選択」という基本的な技術を十
分習得していないという事情もあるも
のと思われる。こうした真面目さを
「受動的」と解してしまうのは酷なの
であろうか。

またパワーポイント教材をメインに
据えると、板書のスペースが限られる
ため、授業中の学生の反応をうかがい
ながら臨機応変に展開をすることが難
しくなる。講義を行った教室は横長の
間取りで、パワーポイント表示を左右
二枚のスクリーン上で行ったため、現
実的に板書が不可能となってしまった。
今後、何らかの形で板書との併用の道
を探っていかねばなるまい。

あるいは、慢性的な情報過多にあり
ながらも、逆に「発展的学習」に向け
てのガイドも要請されることも多い。
果たして現実的にどの程度の需要があ
るのかはわからない。それでも半ば専
門的関心を有する学生も少数ながら参
加していたので、通常のレジュメのほ
かに、「発展的」と銘記した資料を添
付するという、(教員側にしてみれば)

非効率的極まりない方式で対応した。
その労が報われたか否かは定かではな
く、むしろ煩瑣に映った可能性のほう
が高い。ただ、過剰なまでの情報化社
会に否が応でも生きざるを得ない学生
にとっては、少なくとも情報過多とい
う現実を対自化せざるを得なかったと
いう意味では、無意味ではなかったも
のと祈っている。

また、今日当然のように要求される
映像資料についても、その有効性は否
定しえないが、配慮も要される。掻爬
の実際、ラザロ兆候、減数手術のビデ
オ、無脳児など、この授業では「あえ
て」見せる方針ではあった。生命倫理
問題をめぐっては、理論的な議論にで
は本質的に収束し得ない側面もあり、
「これを見て生きていると思うか？」
といった「現象的自明性に訴えかける」
論法にも正当性も必要性もあろう。だ
が、プロ・ライフ派のサイトでは「回
心」への手段として様々な映像が「証
拠」として載せられているように、見
せ方によっては意図的な意見誘導も不
可能ではない。こうした自戒をもって、
「あえて歯切れを悪くする」ことを心
がけたが、「遠回り」の効用もあるも
のと信じたい。

断る口実が見つからず、引き受けて
しまった本稿であるが、「授業探訪」
に掲載させていただくには正直「おこ
がましい」気がぬぐえない。ただ本人

にしてみれば、自分の講義の至らなさを反省する有意義な機会となった。お読みいただいた方には恐縮の限りではあるが、試行錯誤の道程も「それなり」のご参考になることを願っている。

いいだ あつし
(本学兼任講師)